

テーマ：誕生された神の御子イエス・キリストがどれほど“遜られた”のかを考える

※ルカ 2:20

「羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」

### ○遜られた王：イエス・キリストの三つの姿(6-8)

#### 1. キリストは“全ての初めから” \_\_\_\_\_方(6)

※ヨハネ 1:1-2

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」

▷「神の御姿」(ギリシャ語：モルフエー)

※ヘブル 1:2-3

「…神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」

#### 2. キリストは“ご自分を無にして” \_\_\_\_\_方(7)

※マルコ 10:45

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」

#### 3. キリストは“従順に” \_\_\_\_\_方(8)

▷「自分を卑しくし」

※ヨハネ 4:34

「イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみところを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」

※ヨハネ 6:38

「わたしが天から下って来たのは、自分のところを行うためではなく、わたしを遣わした方のみところを行うためです。」

▷「死にまで従い」

※ヨハネ 10:18

「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」

※ヨハネ 1:4

「わたしはいのちのパンです。」

※ヨハネ 6:48

「この方にいのちがあった。」

※ヨハネ 14:6

「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」

※ヨハネ 5:21

「父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。」

▷「実に十字架の死にまでも従われました」

「ローマ市民を縛ることは犯罪であり、鞭打つことは邪悪であり、死刑にすることはほとんど親殺しと同じである。では、十字架に付けることはどうであろう？その罪深い行為は、どんな酷い言葉でも十分に表現することなどできない。」  
「(十字架刑は)最も残酷で、極めて不快な罰である。…十字架の名をローマ市民の身体からだけでなく、その考え、目、耳からさえ遠ざけよ。」(古代ローマ政治家/哲学者 キケロ)

「十字架刑による死は、めまい、痙攣、渴き、飢え、不眠、発熱、恥、恥辱、絶え間ない激痛、恐怖に壊死といった、苦痛と死が持つ恐ろしさや凄惨さの全てを含んでいるように思われます。その全てが耐えられる限界まで強められていながらも、苦しむ受刑者が意識を失う一歩手前で止まっているのです。…一つははっきりしていることがあります。一世紀の処刑は、現代のものとは異なり、迅速で苦痛の伴わない死や犯罪者の尊厳を保つことを求めてはいなかったということです。それどころか、犯罪者を完全に辱める、激痛を伴う拷問が行われたのです。このことを理解することは、キリストの死の苦しみを理解する上で重要なことなのです。」(フレドリック・ファーラー)

※申命記 21:23

「木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。」

※ガラテヤ 3:13

「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちが律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである」と書いてあるからです。」

※マタイ 27:46

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」

※エペソ 2:1-3

「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中であってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちがみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」

※ローマ 5:8

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」